



ダ・ビンチ手術始末記

荒木 勝利

私は、明るく短気な性格の74歳です。25年3月横浜市健康診断時、前立腺特異抗原（PSA）異常値が判明しました。家庭医の指導を得ながら精密検査に進み、その結果初期のガンが発見され、治療法選択の段階で、ダ・ビンチ（手術支援ロボット）を備えた病院を紹介していただきました。

新しい病院は、診察2か月待ちでした。妻共ども多くの不安を抱え診察室の丸椅子に座りました。担当Drは笑顔でゆっくり、そして優しく治療方法の全体を描き出して下さいました。全摘根治、放射線、ホルモン、経過観察の4種の治療法のメリットとリスク。今後に憂いを残さない摘出手術をお願いしました。手術に向けて検査が進み、持病の狭心症に加え、新たに貧血症が見つかり、血液内科での治療開始。3月・4月と経過しました。しかし、貧血のリスクで貯血は困難と納得、手術中必要な場合は輸血すると決まりました。

6月12日入院、病室は8階6人の大部屋ですが、院内は広く明るく、広い通路、爽やかな看護スタッフの笑顔、窓際のベッドで陽光と大空の展望は抜群、清潔な寝具類、カーテンながら個室感覚等完璧、恵まれた環境に感謝・感謝です。

翌13日9時、緊張して手術場へ。入り口で昨日説明してくれた看護師さんの対応で平常心になり、手術台へ上がりました。・・・そして、気がついたら8階回復室でした。手術6時間、私には瞬きする時間でした。その夜、「輸

血はなし、血小板40万、等々経過順調です。」優しいDrの声を聞き、思わず手を合わせることができました。

妻も朝から付き添ってくれ、何かと細かく気を遣ってくれました。特に足の裏の指圧をしてくれた時は、全身の黒い血が飛んで行くような心地でした。「この気持ち、生涯忘れまい」と妻への感謝を誓いました。

ダ・ビンチ手術から4週間、まだ尿取りパッドは外せませんが、「回復状態は平均より上のようなようですね」とのDrの言葉を励みに、骨盤底筋運動に励んでおります。

